

論文審査の結果の要旨

論文提出者氏名 長谷川弘基

本論文は、元来、古典ギリシャ時代より「描写」を意味する修辞学上の用語・概念であった ekphrasis を、ホメロスの『イーリアス』に見られるアキレスの盾の描写に始まる、美術作品の文学的描写の意味に取る伝統に従い、さらに、20 世紀、とりわけ 1967 年の M. Krieger 論文以来、注目されるに至った文学批評概念としての ekphrasis を詩の分析・批評のための手段として用いることの有効性を、理論と実践の両面において実証することを目的として執筆されている。本論文の理論的立脚点は、W. J. T. Mitchell による ekphrasis 論であり、ekphrasis において、詩人の自我と他者の関係のさまざまな様相が具現化していることを実作品の分析と批評を通じて明らかにしている。

論文は Introduction に加えて 5 章から成っている。

Introduction は、本論文の理論的枠付けを提供する重要な部分であり、ここでは、広義・狭義の ekphrasis の概念を検討し、18 世紀の Lessing に始まる、20 世紀までの文芸批評家や文学研究者による ekphrasis の概念・用語の使われ方を整理した上で、1) 文学と絵画の比較研究、2) 記号論的アプローチ、3) 「現象論的」アプローチの三者にまとめ、実作品の分析には、「現象論的」アプローチが最も有効であるとしている。

このアプローチでは、言語的なるものと視覚的なるものとの間に、能動的に、見、語る、優勢な支配者と、受動的に見られ、黙し、抑圧される被支配者との力学、分裂、対立を認めるのが特徴的である。この方法論を採るのが、本論文が依拠するところ大である、Mitchell であるが、彼が ekphrasis における詩人の他者に対する態度を、無関心、希望、恐怖の 3 つに分類したのに対し、無関心と恐怖の間に、「受容」ないしは「諦観」、積極的には「責任」という態度も措定する必要を説いている。

以下の章では、以上のような Introduction での理論的考察と提言が ekphrasis を正面から体現している実作品のみならず、通例では ekphrasis の作品とは見なされない作品までも射程内に収めて検証されることになる。

第 1 章ではロマン派の詩人、W. Wordsworth の "egotistic sublime" が同じくロマン派の詩人、J. Keats の "negative capability" との比較、対照の上で取り上げられ、Wordsworth が、画家、視覚的なものよりも、詩人、言語的なものを優位とみなし、他者の理解において、いかに画家よりも詩人の方が勝っていると考えていたかを分析している。そして、その見られるものに対する詩人の優位性が、直接的には美術作品を主題としていない作品においても、単に見られる対象として受動的で、ひたすら沈黙する他者に対する、見る側としての、言葉を発する詩人の優位性にも見られると指摘している。

第 2 章では、最初に一般に ekphrasis の代表的作品とされる Keats のギリシャの壺に寄せる詩その他の作品を取り上げ、Mitchell やその流れを汲む Scott らが男性的凝視者対女性的イメージの対立、さらにはその逆転形である女性が男性を無力化する恐怖という単

純化された構図で捉えようとしたことに異議を唱え、Negative Capability との関連で捉え直すべきことを主張している。Keats の場合は Wordsworth の場合と対照的に、自我を否定し、不可解な他者を謎として謎のまま受容することにより、他者とのコミュニケーションを願望しつつも、結局は他者理解を断念し、いわば他者と距離を置いて眺めることに止まる傾向が特徴的であるとしている。

以上のように ekphrasis における他者に対する態度の両極端を見据えた後、以下の章でさらにそれらの中間に位置すると見なせる 2 人の詩人の作品が分析されることになる。

第 3 章では、19 世紀後半から 20 世紀前半にかけての詩人 W. B. Yeats の作品が取り上げられ、死や喪失、不在、時の不可逆性、そして回復の可能性の問題が elegy と関連づけられ、ekphrasis に内在する問題として論じられる。特に、他者が過去に位置付けられ、詩人の自己が現在と等価ととされることにより、時の観点から ekphrasis を捉え直しているがこの章の特徴である。Yeats には、Wordsworth、Keats と異なる、第三の道、すなわち、自己と他者の断絶を認めつつ、そのいずれも否定することなく、両者を共存、並置させ、曖昧なまま受け入れる態度が見られるとしている。

第 4 章では、20 世紀後半の詩人、Ted Hughes の elegy 詩集『誕生日の手紙』から多様な作品を取り上げ、これまで伝記的読みに偏っていた解釈を補完するものとして ekphrasis、とりわけ、不在の者に関する記憶の観点からの解釈を導入することによって、この詩集における自己と他者の問題に肉薄しようとしている。Ted Hughes の場合は、究極的には理解不可能な他者を理解不可能なものとして認めつつも、意志疎通の努力の試みはあくまで続けようとする態度を看取り、その程度が Yeats の場合よりもさらに凝縮していると指摘する。

結論となる最終章の第 5 章では、オヴィディスの『変身物語』の Ted Hughes 訳の中から特にナルキッソスとエコーの物語における、視覚的なイメージと聴覚的な言葉との対立に見られる自我と他者の関わり方を例とし、我々と究極的には異なる他者を、その差異性を否定することなく、理解することは可能か、という問題を ekphrasis を通じて考えられるとし、第 1 章から第 4 章まで扱った詩人における自我と他者の関係を振り返ってまとめている。

ほぼ以上が本論文の主要な論点と具体的な分析の内容、および結論の概要である。これで明らかなように、著者は従来の ekphrasis 論に立脚しながらも、その不備を補いつつ独自の説を提唱し、それを実作品に応用してその有効性を検証することに成功していると言える。具体的には、まず第一に、ekphrasis に内在する自己と他者の問題に注目し、それが単に美術作品を主題とした作品のみならず、現存、あるいは不在の人間が対象の作品の分析、解釈にも有効であることを論証した点、そして、第二に、著者自身は必ずしも明言している訳ではないが、いわば縦軸に自己と他者の関係を据えると同時に、横軸に過去から現在への時の経過という要素を措定することにより、ekphrasis を考察するに当たって、「時」の考えを導入した点が挙げられるだろう。この第二の点は本論文の後半、第 3 章、第 4 章で特に顕著である。Lessing 以来、ekphrasis に空間と時間の対立概念を認めるのは一般的であったものの、それはあくまで構造的考察からであって、本論文のように「現象論的」な視点からのものとは言い難かった。この「時」の軸を据えることにより、記憶、不在、蘇生等の興味深い視点が、特に elegy の genre に属する作品の解

積に際して興味深い光を照射することになっている。ekphrasis と elegy のいわば橋渡しに成功し、ekphrasis の門戸を広く開放した本論文の功績は高く評価されてよいだろう。さらに、1998 年というごく最近に出版されたばかりで、書評を超えた本格的な学問的研究はこれからという Ted Hughes の詩集に ekphrasis の観点から説得力ある分析と解釈を加えた意義は、本論文の顕著な貢献の一つと言える。

とはいえ、改善の余地が全くないという訳ではない。まず、ekphrasis の定義と批評の手段としてのその応用の間に、一種の乖離が認められる。従来の定義を踏まえつつも、より広い応用範囲を包含しうる、著者独自の定義を提案できなかった点が惜しまれる。また、自己と他者の問題を考える際に、著者はしばしばフランスの 20 世紀哲学者 Levinas を引き合いに出しているが、Levinas を援用する必然性が必ずしも明らかでなく、また、方法論としての「現象論」ないしは現象学に関する理解と咀嚼が十分とは言い難い恨みがある。分析の俎上に乗せた実作品の選択基準、必然性も明確に示されていない。こうした若干の問題点は残しているものの、論の根幹を揺るがすようなものではなく、その多くは著者の今後の研鑽に待つべき事柄であって、本論文の学問的意義と貢献をいささかも損なうものではない。

したがって、本審査委員会は博士(学術)の学位を授与するにふさわしいものと認定する。